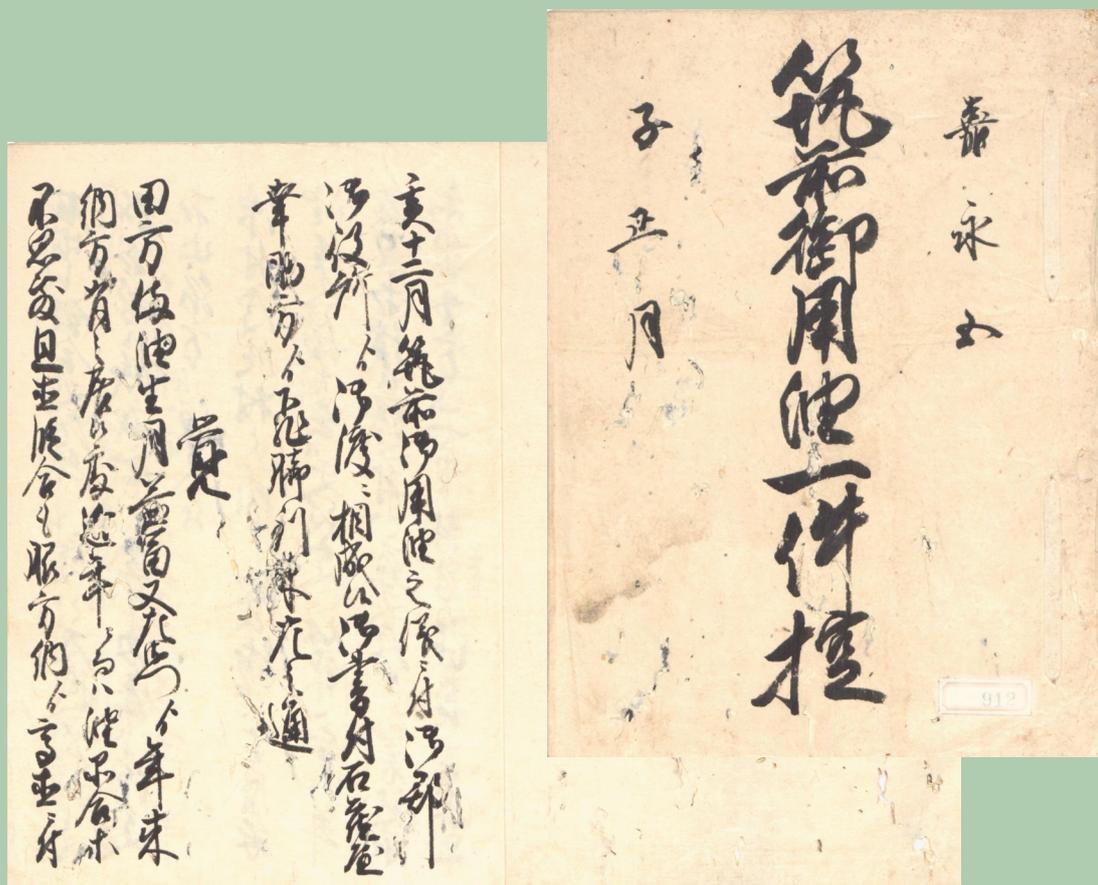


こ も ん じ よ

# 古文書だより

第1号



ますどみ  
益富資料 912

ちくぜんごようあぶらいっけんひかえ  
筑前御用油一件控

益富組と福岡藩との関係を表す資料。益富組は福岡藩へ虫害予防の必需品である鯨油を納入していた。この資料は嘉永5年(1852)に作成されたもの。文中に博多商人「石蔵屋」の名が見える。

## 目次

令和3年度新収蔵資料 益富資料 ……2

収蔵品データベースの公開開始 ……3

インフォメーション

～令和3年度古文書資料活用実績～ ……4

## 令和3年度 新収蔵資料

福岡市総合図書館は平成8年6月に開館して間もなく27年目を迎えます。なかでも文書資料部門は福岡市の文書館として、地域の歴史の情報資源となる古文書や歴史的・文化的価値をもつ公文書等を収集、保存するとともに、利用者のみならずへ資料や情報を提供しています。

古文書資料は国立公文書館から専門性を認められた認証アーキビスト3名が担当し、寄贈、寄託、購入、マイクロフィルム収集によって令和3年度末までに約8万2千3百点を収蔵しています。今年度は新たにマイクロフィルム収集した益富資料の公開を始めます。

古文書資料は原則として、総合図書館2階の文書資料室でマイクロフィルムによって閲覧できます。ご利用について詳しくは、当館ホームページの「文書資料室」内にある「古文書資料のご案内」をご覧ください。

ご利用について  
詳しくはこちら



福岡市総合図書館 古文書資料

〈マイクロフィルム収集資料〉

ますとみ

### 益富資料

長崎県の生月(いきつき)島(平戸市生月町)に、かつて益富(ますとみ)組という巨大な鯨組が存在しました。「鯨組」とは、捕鯨業を営む集団のことです。生月島は、平戸島の北西に位置し、東西3キロ、南北約10キロの南北に長い地形で、いわゆる「かくれキリシタン」信仰の文化を継承している島としても知られています。生月島を拠点とする益富組は、近世中期から明治初期に至るまで鯨組の経営を行いました。

益富資料(益富氏所蔵)とは、益富家に伝来した資料群です。内容は、益富組が営んでいた捕鯨業に関わる資料群がその大半を占めています。益富組は福岡藩とも鯨商品の取引を通じて密接な関係を築いていました。

当館では、益富家から資料をお預りし、資料の公開に向けた整理作業を継続してきました。その内、データを作成した1355点について、令和3年度より「福岡市総合図書館古文書資料収蔵品データベース」による公開を開始しました。公開した資料は、当館2階の文書資料室においてマイクロフィルムによって閲覧に供しています。

益富資料は今後も順次公開していく予定です。

### 益富家と捕鯨業

益富家の先祖は甲斐の武田氏の家臣であり、武田氏滅亡後に平戸へ移り、畳屋の商売をしていたと伝えられています。益富家は、「益富」姓を平戸藩より賜る以前には「畳屋(たたみや)」を名乗っていました。分家には、「山縣(やまがた)」家と「畳屋」家があり、本家である益富家とともに益富組の経営を担いました。益富組本家の初代である又左衛門正勝は、享保10年(1725)に田中長太夫と共同事業で捕鯨業を開始しました。その後単独で鯨組を継続することとなった正勝は、享保14年に拠点を生月の館浦(たちうら)から御崎浦(みさきうら)へ移しました。当初は不漁だった捕獲高は飛躍的に増加し、全盛期には約3千人を越える規模の労働者が働いていたと言われていました。しかし、弘化期(1844～1847)頃から不漁に苦しむようになり、嘉永期(1848～1853)には経営不振に陥りました。益富組は、万延元年(1860)にいったん休業となり、明治初期に再度操業を試みるも、明治7年(1874)には完全に廃業しました。



38 大漁日録

天保10年(1839)に作成された鯨の漁獲に関する日誌。

益富組の捕鯨の様子

鯨の捕獲の時期には「冬組」と「春組」があり、「冬組」は「小寒十日前より彼岸十日前まで」の下り鯨を、「春組」は「彼岸十日前より春土用明て後廿日許ほど」の上り鯨を捕獲しました。益富組の漁場は、平戸藩領を越えて大村藩・五島藩・長州藩・対馬藩に至っていました。

実際の鯨の捕獲は、まず「山見(やまみ)」が鯨を発見し、船へ知らせるところから始まります。山見は、陸の高台から海に泳ぐ鯨を発見する役割を担っていました。山見の指示によって勢子船(せこいぶね)が漕ぎ出し、双海船(そうかいぶね)が網を張る網代へ鯨を追い立てました。勢子船は、鯨を網に追い立てて銚を打つ役割を、双海船は鯨に網をかける役割をそれぞれ担っていました。海の上で船を指揮し、鯨に銚をつけて捕獲するのは「羽指(はざし)」と呼ばれる人々です。勢子船から鯨に向かって綱がついた銚(もり)を何本も突き、さらに「剣」と呼ばれる道具を突き刺します。最後に羽指が海に飛び込んで鯨の背の上に乗ります。鯨に綱をかけ、鯨が沈まないように船に繋ぎとめました。鯨が息絶える時には、鯨を捕獲した人々によって念仏が唱えられたと伝えられています。なお、厳寒の生月島周辺の海で人々が鯨を捕獲する様子は、司馬江漢(しばこうかん)の『西遊日記』に詳細に記録されています。

益富組と福岡藩

益富組は、福岡藩と非常に深い関わりを持っていました。それは鯨油の流通によって特に顕著に表れています。江戸時代には、稲の虫害を防ぐために鯨油が用いられていました。享保17〜18年に大規模な飢饉に見舞われた福岡藩にとって、稲を守るための鯨油は欠くことのできない必需品でした。益富組の鯨油販売は、こうした事情を抱える福岡藩の鯨油需要を満たしました。福岡藩は鯨油を安定的に確保するために、益富組の保護を目的とする貸付を行ったり、益富又左衛門へ「拾人扶持」を与えるなど、益富組を優遇する政策をとりました。実際の取引は、主に博多綱町(現、福岡市博多区須崎町)で相物(あいもの)問屋を営んでいた石蔵屋と行っていました。益富資料には、益富家と石蔵屋との深い関係が分かる資料が多く残されています。(鈴木)



238 筑前御用油納目録

嘉永5年(1852)に作成。益富組から福岡藩へ納入された鯨油に関する記録。

収藏品データベースの公開開始

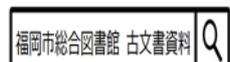
福岡市総合図書館は、平成7年度から令和2年度にかけて、『古文書資料目録』を26号まで刊行してきました。令和3年度からは新たな『古文書資料目録』の刊行を休止し、当館ホームページで「福岡市総合図書館古文書資料収藏品データベース」の公開をはじめます。

まずは、新たに収蔵した益富資料1355点、目録1号の伊丹資料、目録19号から25号までの全資料群のデータを公開します。詳しくはホームページの「文書資料室」内にある「古文書資料のご案内」をご覧ください。

データベース  
は  
こちら



ご利用方法や  
掲載資料の  
詳細はこちら



古文書資料はいろいろな場面で活用されています。令和3年度の活用実績の一部を紹介します。



かみやそうたんぞう

**神屋宗湛像**

『平成8年度 古文書資料目録 2』 マイクロフィルム収集資料 神屋二郎資料 4

[放送番組] NHK BSプレミアム「英雄たちの選択」

戦国ミステリー 千利休はなぜ死んだ？～天下人秀吉との攻防～  
初回放送 令和4年2月16日

[出版物] 太田浩司編『石田三成一関ヶ原西軍人脈が形成した政治構造一』  
宮帯出版社、令和4年3月

戦国時代の博多の豪商、茶人として知られる  
神屋宗湛の肖像画（神屋善四郎氏所蔵）

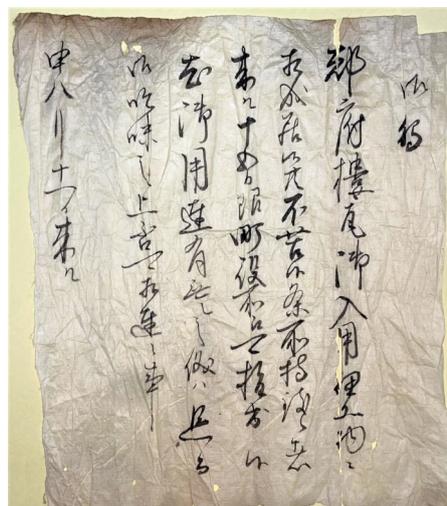


とふすずりき

**都府硯記** 都府楼の瓦硯に関する記録

『令和2年度 古文書資料目録 26』 寄贈資料  
藤史明資料（追加分） 151

[展示] 太宰府市文化ふれあい館「まるごと太宰府歴史展2021」  
会期 令和3年8月14日～11月3日

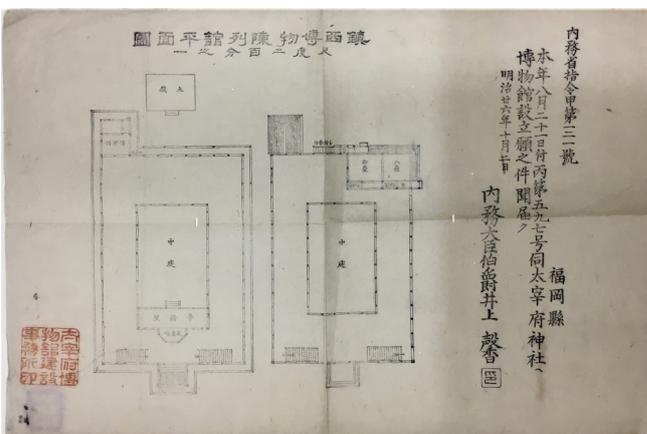


おふれ

**御触** 「都府楼瓦」に関する文書

『令和2年度 古文書資料目録 26』 寄贈資料  
遠藤栄雅資料（二） 120-79

[展示] 同「まるごと太宰府歴史展2021」



ちんぜいはくぶつちんれつかんへいめんず  
**鎮西博物陳列館平面図**

『平成21年度 古文書資料目録 15』 寄贈資料  
三宅剛照資料 1083

[展示] 同「まるごと太宰府歴史展2021」

明治26年(1893)太宰府神社への博物館設立願を  
聞き届けたことを伝える内務大臣井上馨から福  
岡県宛の内務省指令甲第121号

本誌に掲載の画像は無断転載を禁じます

古文書だより 第1号 発行日 令和4年(2022)3月31日

編集・発行 福岡市総合図書館 文学・映像課 古文書係  
〒814-0001 福岡市早良区百道浜 3丁目7番1号  
TEL 092-852-0634 FAX 092-852-0609  
URL <https://toshokan.city.fukuoka.lg.jp/>

■編集後記 初めての「古文書だより」  
をお届けします。今後も古文書資料に関  
する情報発信を工夫していきますので、  
よろしくお願いいたします。（三角）